輝坊といっしょに

共働きの育児日記

早乙女直枝・勝元著

新日本新書 65

輝坊誕生から３年間の体験を通じ
愛情・健康・集団保育など常識の盲
点をつく。忙しい母親に励ましを
あたえ父親の役割をも語りかける

早乙女　直枝（さおとめ　なおえ）
1940年生
小学校教師
早乙女　勝元（さおとめ　かつもと）
1932年生
作家
著書「小麦色の仲間たち」「青春の歯車」
「下町の恋人たち」「東京大空襲」など

輝坊といっしょに　　新日本新書　65

1968年10月25日　初　版
1974年2月15日　第17刷

著者　早乙女直枝
早乙女勝元
発行者　松宮龍起

郵便番号102　東京都千代田区富士見2の13の14
発行所　株式会社　新日本出版社
電話　東京（265）7006（営業）
（265）2075（編集）
振替番号　東京　13681
印刷　光陽印刷株式会社　製本　飯塚製本

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

輝坊といっしょに

共働きの育児日記

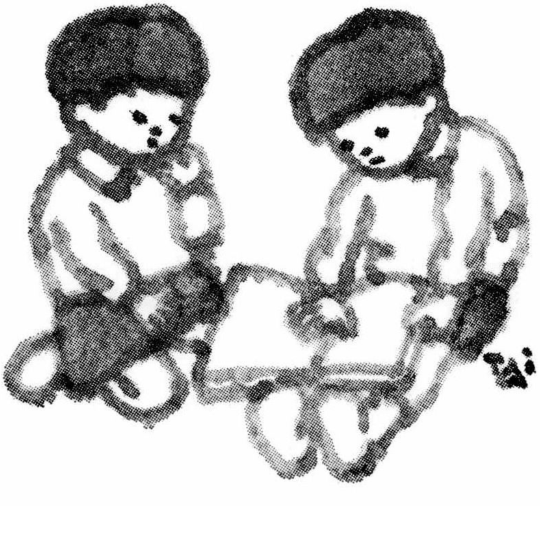
早乙女直枝・勝元著

新日本新書＝65

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会



（カット 安泰）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

目次

はじめにひとこと……7

小さなこぶしにぎりしめて

第一話　母親の実感、父親の実感……12
第二話　小さなこぶしにぎりしめて……17
第三話　産休あけの悩み……24
第四話　満員電車で……30
第五話　輝坊は板にねる……36
第六話　おなかをじょうぶに……43

やっと保育園に

第七話　やっと保育園に……48
第八話　最高の愛情とは?……54
第九話　スリルが大好き……60
第一〇話　北風のなかを……65

第一一話　あまいものは毒……72
第一二話　はじめての病気……79

ボクは満一歳

第一三話　ボクは満一歳……86
第一四話　大きくなったら……93
第一五話　輝坊、こんにちは！……99
第一六話　あるいた、あるいた！……104
第一七話　困るのは〝坊やあげましょうね〟……111
第一八話　あだ名はピリちゃん……117

泣くのも薬

第一九話　輝坊のひとりごと……124
第二〇話　環境が大事……130
第二一話　ごはんは七分づき麦入り……136
第二二話　さいしょのことば……142
第二三話　泣くのも薬……147

第二四話　満二歳！……153

コレナァーニ？

第二五話　てれちゃうナ……162
第二六話　あそび場がなくて……167
第二七話　ことばが豊富に……171
第二八話　夜の散歩道で……177
第二九話　コレナァーニ？……183
第三〇話　はじめての海……188

ぶたれても負けるな

第三一話　ジュンパンよ！……194
第三二話　番外一等……200
第三三話　親にも忍耐力が……207
第三四話　ぶたれても負けるな……213
第三五話　がんばろうの歌……219
第三六話　四月にはおにいちゃんに……225

さいごにひとこと……233

はじめにひとこと

思えば、三年前の冬の日のことでした。

わたしは、大きなおなかをかかえて、彼とともに神田の町を歩いていました。

やがて生まれてくるはじめての赤ちゃんのために、参考になるよい育児書はないものかとわたしたちは、いそがしい時間をさいてさがしにきたのです。

神田でも一、二をあらそうような大きな本屋さんにはいりますと、〝育児〟というたなに、何十冊とかぞえきれないほどたくさんの育児書が、きらびやかにならんでいるのにはおどろきました。でも、共ばたらきのわたしたちに、ピンとくるような育児書はありません。

「金ありひまあり庭ありで、母親がつきっきりでやる式の育児書がほとんどだ」

一冊ずつ、かたっぱしからひろい読みしていた彼が、ため息まじりにいいました。

「ほんとね、家で赤ちゃんのせわだけしていられる女性なんて、このごろはめったにいないのに……」

「だれだって理想どおりの育児をやりたいのはやまやまだけど、じっさいはそうできない。だから、育児ノイローゼになるおかあさんも出てくるんだね」
「身にしみてるおかあさんが、書いてくれればいいんだけど」
「これからの育児は、どうやら、自分たちの生活の中で創意を生かし、自分たちの力で作りだしていくしかないいんだな」
「そうよ、これまでに残されたたくさんのひとの知恵も借りてね」
と、わたしはちょっぴりつけたして、彼の意見に共鳴したものでした。
わたしたちは共ばたらき。わたしは、下町の小学校の音楽教師。彼は売れっ子とは反対のじみすぎる作家。いわずとしれた金なしひまなし庭なしで、これから生まれてくる赤ちゃんを、自分たちの創意と力とで、なんとかいきいきとたくましく育てようと思いつめてみたものの、それはずいぶん漠然としていて不安なものでした。
一九六五年三月三日。とうとう、新しい生命が誕生しました。
色のまっくろな、みながびっくりするほど元気な男の子です。わたしたちは、このはじめてのボーヤに、輝（てる）と名づけました。小さなこぶしをにぎりしめて、オギャアオギャアとからだ全体で泣く輝坊の顔を見つめながらわたしは、これから歩いていく道すじに一つ一つた

ちふさがる壁を、この子といっしょにのりこえるたびに記録をつけよう、そして、その記録をわが子への贈り物にしたいな、と考えたのです。

さいわい、『新婦人しんぶん』が月一回ずつの連載で、輝坊の成長記録を写真つきでのせてくださり、連載が三年つづいて、このたび、手を加えて一冊にまとめることになりました。

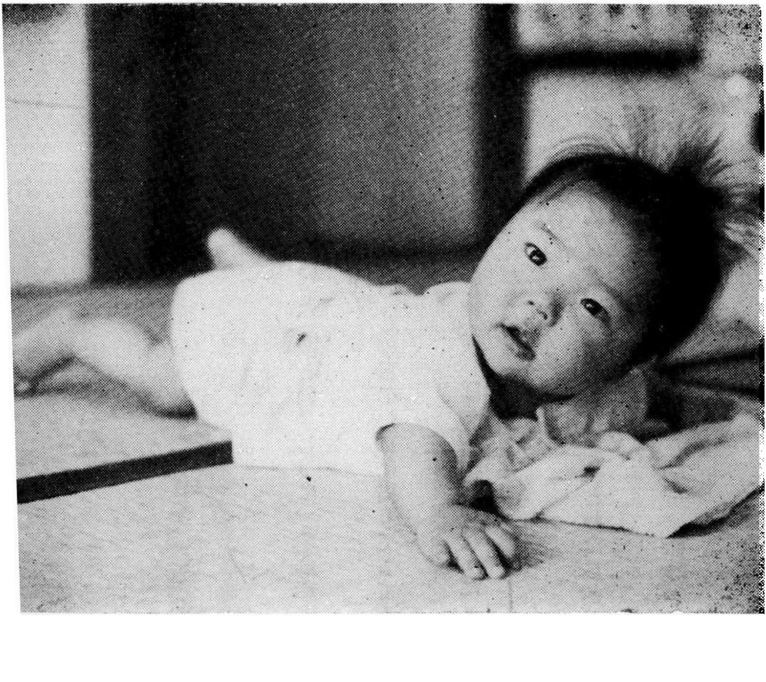
「でも、せっかく本になるなら、はたらく人たちの育児の悩みにこたえるものにしたいね」と彼がいうものですから、わたしは家庭とつとめのあいまをぬって、毎晩眠い目をこすりながら三年間の記録を手なおしし、そこに彼がまたペンをくわえて、とくに健康法の出てくるところは鉄砲洲診療所の木下繁太朗先生のアドバイスまでいただき、一般の育児書とはちょっとちがったものになりました（本文中の注は先生に書いていただいたものです）。

わたしたちは、もともと育児の専門家ではありませんので、この記録はもちろん一つの経験にすぎませんけれど、こんにち共ばたらきの若い夫婦が、どのような考えかたで育児にあたったらよいのかを、輝坊といっしょに、一生けんめいさぐってみたつもりです。

この本が、はたらくみなさんに親しまれるならば、わたしは最高にしあわせです。

早乙女直枝

小さなこぶしにぎりしめて



第一話　母親の実感、父親の実感

退院の日、わたしは、生まれたばかりの赤ちゃんを抱いて、彼といっしょに、葛飾赤十字産院の前から車に乗った。

車は、家の近くに住む加藤印刷のおじさんが、わざわざ、この日のために借りてきてくださったという特別のプリンスだ。

「この子が大きくなったとき、生まれてはじめて乗った車を、ぼくが運転したんだといえば、これはちょっとばかり話のタネになる、もうけもんだよ。はっは……」

ハンドルをにぎりながら、加藤さんは、歯ぎれのいい声で笑う。

入院のときにももちろん、わたしは車できたわけだけど、そのときは、彼とわたしと二人きりで不安だけを胸に抱いてきた。それが一週間たったら、ちゃあんと一人ふえている。なんとみちたりた誇らしい気持ちだろう。どこの母親も、みんなこんな気持ちを一度は味わっているのかしら。悪くはないなと、わたしは車のなかでつぶやく。

お産も、早くから無痛分娩の補助動作をこころみたので、意外と楽だった。赤ちゃんは三月三日生まれの男の子で、体重三千百二十グラム、標準だ。ちいさなくせに、びっくりするほど大きな声で泣く。それがフギャアフギャアときこえる。顔のひふがうすいから、泣くと顔中に血がのぼって、火のように赤くなる。となりにすわった彼は、まるで、はれものにでもさわるようにビクビクオドオド。

加藤さんが、ハンドルをさばきながら、彼にたずねた。

「どう、父親になった感想は?」

「さあ」

と、彼は頭をかいて、

「なんだか、さっぱり!」

「さっぱりとは、たよりないね」

「女性は、ほら、直接じぶんのからだを痛めて生むから、もうそれだけで母親の実感はあるんでしょうけど、亭主というのは妙なもんですね。ぜんぜんピンとこないですよ」

「まあ、そういうもんだろうね」

「……でも、どっちにしたところで、これからオヤジとしてのいろいろな重みがどっしりと

肩にのしかかってくるんだ。それだけはたしかだろうから、もしかすると、その重みによって夫は好むと好まざるとにかかわらず、父親としての実感を味わわされるんじゃないかなあ。いやというほど」

ふーん、父親というものは、そんなそっけないものかしらと、わたしは思い、なんだか、この世の男性がみなあわれにも思えてくる。わたしは、こんなみちたりた気持ちでいるというのに……。

いろいろな重みというのは、ひとことにいって、経済的なふくみがいちばん大きいだろう。では、経済的なふたんが解消すれば、それだけ父親としての実感がうすらぐということになるのだろうか。そんなことはないはずだ。彼のいうことはたしかだけれど、それはこの日本の現実の中では――と、つけたしてもらったほうが、より正確かもしれないと思う。

ところで、わたしたちは共ばたらき。

彼は小説を書き、わたしは小学校の音楽教師で、おたがいにそれぞれ仕事があるから、この子のために、わたしたちの生活はたちまち一変する。いままでのような自由はきかない。経済的にも精神的にも、また物理的にいっても、重い責任がどっさりとかぶさってくるだろう。でも、この小さな生命が、これからどんな未来をきりひらいていくのかしらと考えると、わたし

の胸ははずむ。なにより、きびしさにくじけぬ、たくましい子に育てたい。そんなことを意識しすぎると、かえって保護過剰になるのかもしれないけれど。

「さて、命名を書くかな」

家につくと、まっさきに彼がいった。

赤んぼうの名前は輝（てる）――これは、ずっと前からきめていたのだけど、記念になるようなことばは、まだなにも考えてなかった。そこでわたしはふと学生時代に、おこづかいをもらうたびに父からいわれたことばを思いだして、冗談まじりにいう。

「ねえ、こんなのはどう？　〃いつまでもあると思うな親と金〃」

「なるほど」

彼はふんべつくさげにうなずき、

「いいね。子どもの自主性を育てるにふさわしい名言だ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton